学位論文要旨

進路面談における高校教師の指導力向上に関する研究

－学校教育相談のコーディネーションを中心に－

広島大学大学院教育学研究科

学習開発専攻

森本　篤

目　次

第 1 章　問題と目的

第 2 章　生徒のニーズ

　第 1 節　生徒が教師に求めている態度（研究 1）

　第 2 節　ベテラン教師の指導力（研究 2）

第 3 章　教師の現状

　第 1 節　初任者の支援ニーズ（研究 3）

　第 2 節　教師経験と指導力との関係（研究 4）

第 4 章　指導力向上をめざした，相談課による教師支援

　第 1 節　初任者支援（研究 5）

　第 2 節　普通科進学校の新任者に対する支援（研究 6）

第 5 章　総括－本研究の成果と今後の課題－

引用文献

第1章　問題と目的

高校生は自立という発達課題（Hollingworth，1928）を持つとともに，社会への移行期という重要な節目の時期にある（文部科学省，2012）。高校生の自立と社会への移行を支援する場としての進路面談は，担任教師が生徒一人ひとりの生き方の設計に関わる重要な機会である（池場，2006）。進路面談を教師と生徒個人の意思疎通の中心的な場ととらえる視点から，文部科学省は進路面談での教師の指導力向上を求めている（文部科学省，2011）。

進路面談での教師の指導力について，高校の進路指導部対象の全国調査では「生徒理解力」と「個別面談での助言力」という進路面談に関わる能力が，進路指導で求められる能力の上位 2 つであった（リクルート，2003）。一方，進路指導に関わる課題として，指導力の個人差や教師間での考え方の相違があることが指摘されている（ベネッセ，2004）。

生徒を支援する重要な場である進路面談での指導力向上が求められ，課題が指摘されながら，これまで進路面談に焦点を当てた実証的な研究は数少なかった。その数少ない実証的な調査でも，対象とした高校生は個人ではなく集団であった（落合・佐藤・岡本・国本，1995）。また教師－生徒間の面談についての研究は，不登校などの問題を持つ生徒を対象とする発想に基づくものがほとんどであり（山本，2007，etc.），問題のない一般の生徒が対象となる進路面談が研究対象となることはほとんどなかった。

教師が生徒に面談を行う場合には，教師と児童生徒との人間関係が反映する傾向がある（文部科学省，2010）。また高校生は，両価的な心理を抱く時期にある（佐藤，1999）。これらのことを考慮すると，進路面談の研究では，内面的なレベルまでもとらえる必要があるだろう。また，指導力の個人差や教師間

の考え方の相違があるとの指摘を踏まえると,進路面談に臨む教師についても,その個別の内面を検討する必要があると考える。さらに，これらの検討を行うためには,生徒や教師の内面を率直に調査者に伝えてもらうことが重要になる。

そこで本研究では，個別の生徒や教師の内面を率直に伝えてもらうため，2つの工夫をした。1つはPAC（Personal Attitude Construct ：個人別態度構造）分析（内藤，1993）を主として用いることである。この方法は内面的な意識を分析できるという特徴を持っており,進路面談の研究に適していると考えた。もう1つは，筆者が調査対象校の教育相談担当（相談課）教師として「参与観察（participant observation)」（Sullivan, 1953）の立場をとったことである。その際,相談課の立場を生かして,コーディネーションを軸とした。進路面談の場合は。生徒の望む配慮を担任に伝え，教師同士で指導力を伝える，コーディネーションが指導力向上に関し有効ではないかと考えたからである。

以上のことを踏まえ，本研究では進路面談における教師の指導力向上について，相談課の立場からできることを提案することを目的とする。そのために，まず生徒の思いを内面までとらえ，教師にはそうした生徒に対する指導力があるか検討する。続いて，進路面談に臨む教師の思いを内面までとらえて検討する。そして各教師の思いに応じた教師支援を相談課が行い，その効果と意味を検討する。

第2章　生徒のニーズ

第1節　生徒が教師に求めている態度（研究1）

目　的　教師とのうちとけやすさや進路意識について差のある生徒を対象に，それらの生徒が進路面談で教師に求めている態度の共通点や相違点について，PAC分析を用いて確認する。

方　法　*対象者*：対象校（全生徒数 960 名の公立進学校）2 年生 313 名（男子 129 名，女子 184 名）に実施した高校生用学校適応感尺度（内藤・浅川・高瀬・古川・小泉，1987）の「教師関係」得点と「進路意識」得点の合計得点最上位を対象者 A，最下位を対象者 B とした。つまり，A は教師に対して親近感を持ち，進路意識の高い生徒である。一方，B は A とは対極の，教師とはうちとけにくく，進路意識は低い生徒である。

手続き：標準的な PAC 分析（内藤，2002）を実施した。教示文は「進路面談の際，あなたが先生に『話しづらい』こととして，どのようなことがあるでしょうか。また，先生に『わかってほしい』ことは，どのようなことでしょうか。そして，どんな先生との，どんな進路面談があなたにとって『理想的』でしょうか。」とした。

結果と考察　A と B の PAC 分析の比較から，進路意識，教師への親近感が対極の A と B には，予想外に多くの共通点が見られた。それは，①進路に関して不安を感じている，②面談での教師の指導力を評価し，自分の状況を教師の視点から率直に伝えてほしいと願っている，③親と一緒の三者面談でなく，生徒と教師のみの二者面談を望んでいる，の 3 点であった。逆に相違点は，進路面談の場で教師に自分の意見が言えているかどうかと，教師からのアドバイスがもらえているかどうか，の 2 点に見られた。

調査後，A，B が所属している年次の，担任を含む会議の場で筆者が調査結果を報告した。すると，生徒のニーズについて教師たちに新しい気づきがもたらされた。このことから，相談課によるコーディネーションによって進路面談での教師の生徒理解が深まったことが示唆された。

第2節　ベテラン教師の指導力（研究2）

目　的　対象校の教師が前述の生徒のニーズに対応できる指導力を備えているかどうかを検討する。具体的には，自信を持って進路面談を行い，同僚からの評価の高いベテランと初任者の態度を PAC 分析を用いて比較し，分析する。

方　法　*対象者*：教師 C，D であった。C は進路面談に自信を持つベテランである。D は初任者で，自信度は低い。

手続き：標準的な PAC 分析を実施した。教示文は「あなたは，生徒との進路面談で，どんなことが気がかりになったり不安になったりしますか。また，自信を持っていることはどのようなことでしょうか。そして，生徒はあなたのことをどのように見ていると感じていますか。」とした。

結果と考察　C と D の PAC 分析の比較から，指導力の要素として以下の 3 点が示唆された。つまり，①「主人公は生徒」という，進路面談全体を規定する方針を有していること，②「はっきり伝える」こと，③具体的なイメージを生徒に与えること，である。

以上の結果から，C には指導力が備わっていることが示唆された。またその根幹にあるのは，「主人公は生徒」という，進路面談のあらゆる局面に応用できる方針であった。そして，C の持つ指導力は，D には備わっていなかった。

第3章　教師の現状

第1節　初任者の支援ニーズ（研究3）

目　的　研究 2 から，初任者 D には生徒に適切に対応できる指導力が備わっていないことが示唆された。では，初任者はどのような思いで進路面談に臨んでいるのだろうか。指導力向上に関して支援ニーズはあるのだろうか。これらに関し研究 3 では PAC 分析を用いて確認する。支援ニーズを調べる具体的な指標としては，「不安」や「気がかり」，そして「自信」があることした。「不

安」や「気がかり」の程度が高いほど，支援ニーズは強いと考えられるからである。指導力に関わる指標としては，「（担任が）よく知らないことについてどうアドバイスするか」とした。これは，高校生が進路指導ではまずアドバイスを要望していたという調査（全国 PTA 連合会・リクルート，2011）に基づく。

方　法　*対象者*：初任者 E とした。E は筆者が指導教師の立場で調査年度の 1 年間，指導，助言を行ってきた 2 人（D，E）のうちの 1 人である。

手続き：標準的な PAC 分析を実施した。教示文は「あなたは，生徒との進路面談で，どんなことが気がかりになったり不安になったりしますか。また，自信を持っていることはどのようなことでしょうか。よく知らないことについてアドバイスを求められた時には，どのように対応していますか。あるいは，どう対応できたらいいな，と感じていますか。」とした。

結果と考察　E の PAC 分析から，E の支援ニーズの存在が確認できた。そして，その内容は次の 2 点であった。 第 1 点は，大学の学部や大学，将来の職業についての知識不足について，であった。第 2 点は，生徒との話し方について，であった。特に生徒が沈黙した時や目標が明確でない場合の対応に不安を感じていた。

第2節　教師経験と指導力との関係（研究4）

目　的　研究 3 では初任者 E には指導力が備わっていなかったことが示唆された。指導力は経験を積むと備わっていくのだろうか。また経験を積むと進路面談について相談する機会は増すのだろうか。研究 4 では初任者，中堅，ベテランを比較し，経験年数と指導力の関係について検討する。同時に，各教師について，進路面談に関して同僚と相談した経験の有無を調査する。

方　法　*対象者*：対象校に着任 1 年目の教員 6 名（初任者：F, G, 中堅：H, I,

ベテラン：J，K）であった。なお，F は研究 2 での初任 D と同一人物である。

手続き：標準的な PAC 分析を実施した。教示文は比較のため，研究 3 で E に提示したものと同一のものを用いた。

結果と考察　経験年数以外の，性別と担任年次が同じ F，H，K の PAC 分析の比較から次のことが示唆された。この 3 名は普通科進学校の経験年数に大きな差はなかったが，K の指導力は F，H よりも高かったこと，そして，同僚に相談した経験はどの教師にもなかったこと，である。これらのことから，経験を積めば指導力が備わるとは言えないこと，また同僚性が生かされておらず，指導力が個人内の経験に留まっている可能性が示唆された。

第4章　指導力向上をめざした，相談課による教師支援

第1節　初任者支援（研究5）

目　的　研究 4 の結果から，相談課が教師同士をコーディネートし，互いの指導力を伝え合う支援を行えば，進路面談での教師の指導力の向上が期待できると考えた。研究 5 では筆者が相談課として支援を実施し，その効果を検証する。

方　法　*対象者*：研究 3 と同じ初任者 E とした。

手続き：研究 3 の 2 点の結果に沿い，支援の提案，支援の実施，の 2 段階を踏み，支援効果確認のための PAC 分析を実施してその結果を比較，検討する。

研究 3 の 2 点の結果に沿い，筆者は E に対する具体的な支援方法として以下の 2 つの方策を考えた。第 1 は，同僚教師の専門分野を一覧表にまとめ，E を含む教師全員に配布することである。第 2 は，生徒へのコミュニケーションの取り方について，E がベテランから，生徒への対応の仕方についてアドバイスしてもらう会を持つことである。

Table 1　教師の専門分野一覧冊子の作成，配布過程

1．管理職（教頭先生）に「教員相互の意思疎通を促進することを目的として，『〇〇高校の先生がたの専門分野』と題した小冊子を作成したい」と見本例を示しながら筆者が説明した。教頭からは「よい試みですね。先生がたには，気楽に参加してもらいましょう。私は，趣味なども書かせてもらいたいね。」と賛同を得た。
　続いて，教務課長，進路課長にも同様に許可を得た。　(2011年11月下旬)

【見本例】

教科（　　）　氏名（　　）先生

学生時代に興味のあった分野	現在の専門分野	生徒にアドバイスできる仕事・資格など

（教科と氏名は記入してもらうが，各項目は空白でも可とした。）

2．月例の職員会議で見本例のプリントを用いて筆者が趣旨説明を行い，了承を得た。その際，「生徒にも配布する のですか」との質問があったので，「進路面談などで役立てるとともに，教員相互の意思疎通をはかるものなので，教員のみに配布します」と答え，了解された。　(2011年11月29日)

3．職員室の先生がたの机上に筆者が記入用紙を配布し，約1週間後までに全員から回収した。翌週初めに筆者がまとめた冊子（A4の両面印刷で5枚）と簡単なお礼のプリントを各教員の机上に配布するとともに職員朝礼で「ありがとうございました。どうぞご活用ください」と述べた。　(2011年11月30日～12月6日)

Table 2　筆者が行ったコーディネーションの手順

1．指導力のあるベテランV，Wに「進路面談について初任者が不安を持っているようなので，先生の持っておられる面談のコツや考え方を伝えていただけないでしょうか。」とお願いし，両名から了解を得た。
(Vには2011年12月上旬，Wには2012年1月中旬に了解を得た。)

2．ベテランV（50代前半，女性）が，Eともう1人の初任者に対し，アドバイスを行う会を持った。この会は，Vと初任教師2人，そして筆者の計4名がともに授業のない時間帯（45分間）に実施した。
(2011年12月5日)

3．ベテランW（40代後半，男性）が，Eともう1人の初任教師に対し，アドバイスを行う会を持った。この会は，Wと初任者2名，そして筆者の計4名がともに授業のない時間帯（45分間）に実施した。
(2012年1月23日)

注：Vは研究4でのKと同一人物である。

Eは筆者からの上記の提案に同意したので，それぞれを実施した。一覧表の作成，配布については，事前に相談課内で了承を得た上，筆者が相談課を代表する立場で行った。校内の全教師の参加を目指し，管理職を始め関係部署の了解の上，職員会議で了承を取り，実施した（Table　1）。コーディネーションについては，筆者が初任者の指導教師という立場で行った（Table 2）。

結果と考察　研究 3 と研究 5 の PAC 分析の比較から，各教師の専門分野と指導の仕方を伝達する相談課の支援は，E には効果があったことが示唆された。

第2節　普通科進学校の新任者に対する支援（研究6）

目　的　相談課による支援は，初任者だけでなく様々な経験を持つ担任に対

Table 3　教師が対応に困る生徒7タイプの各プロフィール

生徒	特徴と年次	成績	問題点
a	無口で，会話を始めること自体が難しい１年生	中位	①
b	実現困難と思われる夢（宝塚入学）を抱く１年生	やや下位	③
c	自主性がなく，親の言うままの進路を言う１年生	中位	③④
d	親ともども，まだ進路決定の必要を感じない１年生	やや上位	①②
e	希望進路分野と学業成績がミスマッチの２年生	下位	③
f	成績はよいが進路を本気で考えていない２年生	比較的上位	④
g	教師に依存し，進路も決めてもらいたい２年生	中位	②④

注1：「問題点」はキャリアカウンセリングの4つの特徴（渡辺，1992）に照らし，問題と考えられるもの。
注2：生徒はすべて女子（演劇部の生徒が全員女子だったため）。

しても効果があるのだろうか。研究 6 では着任 1 年目の複数の担任を対象に，相談課の支援の有効性を検証する。その際，具体的な指導力の伝達のため，ベテランによる模擬進路面談のビデオ映像を用いる。

方　法　*対象者*：対象校に着任 1 年目の教師のうち，7 月時点で指導力を高めることを希望していた 4 名（P，Q，R，S）であった。

ビデオ制作：次の 4 ステップで行った。1）対象者 4 名を含む着任 1 年目の担任 6 名に「進路面談で対応に困る生徒の事例」を聞き取った。2）事例をもとに，キャリアカウンセリングの 4 つの特徴（渡辺，1992）の観点から「教師が対応に困る生徒」を 7 タイプ設定した（Table 3）。3）演劇部の 7 名の生徒に，各タイプについて役作りをしてもらい，面談のさわりの，進路についての思いを教師に端的に語る部分をビデオに収録した。4）ベテラン 2 名（X，Y）に，さわりの部分に続く仮想面談をしてもらい，ビデオに収録した。なお，X は研究 5 の V，Y は研究 2 の C と同一人物である。

手続き：以下の 1）～ 5）の 5 ステップで行った。1）7 タイプの生徒についての面談のさわりの部分のビデオを視聴する。2）7 タイプのうち苦手と感じる 2 タイプを選び，不安の程度を 5 段階で評価する。3）苦手な 2 タイプの生徒について，X，Y との仮想面談ビデオを視聴する。4）ビデオ視聴後，苦手

な 2 タイプの生徒に対する不安の程度を 5 段階で評価し，どう変化したかを確認する。そして，感想を述べる。5）後日，コーディネーションの有効性を確認する質問を行った。

結果と考察　教師 P，Q，R，S はいずれも，生徒への対応の仕方について，相談課の支援によって不安を軽減させ,今後の見通しがついたことが示された。このことから，支援ニーズのある複数の担任に関して，同僚の相談課の支援によって指導力が向上できることが示唆された。

第5章　総括－本研究の成果と今後の課題－

本研究の目的は，進路面談における教師の指導力向上について，学校教育相談の立場からできることを提案することであった。研究 1 では教師とのうちとけやすさや進路意識にかかわらず，生徒には共通のニーズがあることが示唆された。研究 2 ではベテランには指導力が備わっていたが，初任者には備わってはいなかったことが示唆された。研究 3，4 では経験の長さにかかわらず教師によっては支援ニーズがあることが示唆された。また，教師は相互に助言をしていないことが明らかになった。研究 5，6 では，相談課の行ったコーディネーションによる教師支援の有効性が示唆された。

今回の一連の研究を通し，相談課の筆者が生徒や教師にインタビューし，同僚教師の不安に対応したコーディネーションによる支援を行うことはごく自然なことと受け入れられた。支援の結果，高校教師の専門性の高さは一覧表という形で相互に生かしあえた。また，指導力のある教師に面談方針を直接聞くことや，苦手な生徒への上手な対応の仕方をビデオで視聴することで，ベテランの指導力がニーズのある教師に伝えられた。これらの活動では，互いの空き時間を効率的に利用でき，個別のニーズに対応できた。これらのことは，学校教

育相談の立場からできる活動として今後とも提案できるものと考える。

進路面談について教師を支援する部署としては，管理職や進路指導課も想定される。しかし，管理職は教育相談について知識や技能があるとは限らない。進路指導課は進路に関わる情報収集が主となる部署である。この点について，相談課の教師は教育相談に関わる学校内外での研修を受けている。また，コーディネーションは学校教育相談活動の 1 つである。これらのことから，管理職や進路指導課よりも支援者としてふさわしいと考える。

本研究によって，進路面談においてこれまで相談課が見落としてきた支援ニーズが 3 点浮上した。それは，①特に問題はない一般の生徒の，教師に対するニーズ，②初任者の指導力向上についての支援ニーズ，③経験年数にかかわらず，教師によっては存在する，指導力向上についての支援ニーズ，である。これらが，特に問題のない一般の生徒や教師に内在することを示唆できた点は，本研究の成果と考える。つまり，進路面談での相談課による教師支援は，相談課が見過ごしてきたニーズ（missing needs）を掘り起こす契機になり得たのではないか。

また今回は，相談課としての活動の領域をすべての生徒の発達課題に関わる進路面談，対象を生徒に関わる「すべての教師」に拡大した点に意味があると考える。この種の教師支援は，生徒や教師の個別のニーズはもちろん，生徒の自立を促す教育のニーズにも対応できる。しかも，現在のしくみのままで行える。そして，相談課がすべての教師を対象とした支援を行うことは，間接的にすべての生徒の支援につながる。このことは，相談課のあり方に新しい意味をもたらしたとは言えないだろうか。

今後は，調査対象校を拡大するとともに，校内に潜在し，相談課が見逃しているかもしれない新たなニーズを浮かび上がらせることが求められるだろう。

引用文献

ベネッセ教育総研（2004）. 高校教師が進路指導上困っていること〈http://benesse.jp/berd/open/report/sinroisiki/2004/chapter4/section1_1.html〉（2013 年 2 月 27 日）

Hollingworth, L. S.（1928）. *The Psychology of the Adolescent.* New york: D. Appleton Century Company.

池場　望（2006）. 進路指導の実践的展開　仙﨑　武・野々村　新・渡辺三枝子・菊池武剋（編著）　生徒指導・教育相談・進路指導 田研出版 pp. 210-233.

文部科学省（2010）. 生徒指導提要　教育図書

文部科学省（2011）. 中教審答申　今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について〈www.nier.go.jp/shido/centerhp/22career_shiryou/pdf/career_hattatsu_all.pdf〉（2014 年 11 月 10 日）

文部科学省（2012）. 今後の学校におけるキャリア教育の在り方について　－PART2　各論（③高等学校編）〈www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/aliedfile/2012/01/25/1315459_8_1.pdf〉（2013 年 8 月 12 日）

内藤哲雄（1993）. 個人別態度構造の分析について　人文科学論叢（信州大学人文科学部）, **27**, 43-69.

内藤哲雄（2002）. PAC 分析実施法入門　個を科学する新技法への招待　改訂版　ナカニシヤ出版

内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉令三（1987）. 高校生用学校適応感尺度作成の試み　兵庫教育大学研究紀要, **7**, 135-146.

落合良行・佐藤有耕・岡本政博・国本勝正（1995）. 進路相談において生徒に望まれる教師の対応　教育心理学研究, **43**, 445-454.

リクルート（2003）. 進路指導の実行者として身につけたい能力　2002 年高校の進路指導に関する調査〈http://www.recruit.jp/news_data/library/pdf/20030114_02.pdf〉

（2013 年 2 月 27 日）

佐藤有耕（1999）．友達とのつきあい　佐藤有耕（編著）高校生の心理-①　広がる世界　大日本図書 pp. 11-40.

Sullivan, H. S.（1953）. *Conceptions of Modern Psychiatry.* W. W. Norton & Company Inc., New York.（中井久夫・山口 隆（訳）（1976）．現代精神医学の概念　みすず書房）

山本　奨（2007）．不登校状態に有効な教師による支援方法　教育心理学研究, **55**, 60-71.

渡辺三枝子（1992）．進路相談　宮内博（編）　学校進路指導概論　文雅堂銀行研究社　pp. 327-346.

全国高等学校 PTA 連合会 リクルート　合同調査（2011）．第 5 回　高校生と保護者の進路に関する意識調査〈http://souken.shingakunet. com/research/2011_hogosya2.pdf〉（2013 年 8 月 1 日）